

## 「借りぐらしのアリエッティ」から見る社会背景と思春期の心理変化

学籍番号 1933036 田口菜桜

「借りぐらしのアリエッティ」は、2010年7月17日に公開されたスタジオジブリ映画である。この映画は、1952年にイギリスの児童文学作家メアリー・ノートンによって書かれた「小人の冒険シリーズ」の1作目「床下の小人たち」を基に、2作目の「野に出た小人たち」3作目の「川を下る小人たち」の内容を加えて製作されている。

先行研究では、映画の疑問点、原作との違いを比較し、実際に映画を鑑賞した人の評価を集めた。「千と千尋の神隠し」「ハウルの動く城」のように、冒険や恋愛といった作品であることを公開前から期待がされていたが、公開後は否定的な評価が散見された。

第I章では、なぜ否定的な評価が多かったのかを宮崎駿の企画書を基に考え、作品の舞台変更や物語の改変によって、半世紀前の小人が登場する〈目新しくもない〉古い物語というイメージがついたことを述べた。研究を進める中で、日本の社会傾向が、大量に物を捨てる＝「大衆消費社会」であり、イギリスも日本も原作が書かれた1950年代から始まっていた社会であること、2008年時宮崎駿は〈大衆消費の時代が終わりかけている〉と話していることから、2020年代の日本は、個人が良ければ良いという大衆消費社会を反省し、かつての捨てない、循環する豊かさを取り戻そうとしていることを論証した。

第II章では、主人公であるアリエッティの人物像を、映画の描写や主題歌から分析している。13歳という思春期の多感な気持ちの移り変わり、一人の女性として成長していく姿を映画の場面から考え、翔がアリエッティに発した〈滅びゆく種族〉という言葉、〈滅ぶ〉ということがフィクションではなく現代社会において身近な危機であること、北欧発祥のケルト音楽が特徴的な主題歌を担当するセシル・コルベルが書いた歌詞から、アリエッティが常に未来を求めていることを明らかにした。

第III章では、映画に登場する人間の存在について。家政婦であるハルさんが、物語に重要な役割であること、心臓病を抱え生きること悲観的な翔が、生きること前向きなアリエッティとの交流を通じ、生きる勇気を〈借り〉救われたのだ。

「借りぐらしのアリエッティ」は、映画公開時1950年代に描かれた古臭いと思われていたが、現代の日本にとって社会的な意味はもちろん、けっしてつまらないわけではなく、子どもの成長といった児童文学のテーマを描きつつ、大人にとっても忘れかけている大切な生きる喜びを考えさせてくれる映画である。